

金閣の建築様式について、具体的に解説してください。

室町幕府第3代将軍の足利義満(1358~1408年)はみずからの御所室町殿を将軍となった義持に与え、自分の本拠として西園寺家の北山殿をゆずりうけて、1397(応永4)年から建設に取り掛かりました。もともと西園寺家時代からの懺法堂せんぽうどうなどをそのまま引き継いで、さらに舍利殿(金閣)などを新たに設け、豪勢な邸宅としたのです。義満の北山殿は、北御所・南御所・崇賢院御所の三所から構成されていたのですが、現在の鹿苑寺の寺域は北御所の中心部です。義満の没後、義持が菩提を弔うために鹿苑寺としました。応仁の乱(1467~77年)の時にほとんどの建物が失われ、金閣以外の建物はその後の再建です。

まず、金閣という建物が日本の建築の歴史のなかで、きわめて特殊なものであることを、以下の2点から説明する必要があると思いますので、そこから始めます。

第一は、上に登れる重層建築であること。しかも三層であること。

第二は、各層の様式を意図的にかえていること。

まず、第一点から説明します。

日本で重層建築というときすぐ思い出すのは五重塔や三重塔です。また現存最古の建築の法隆寺金堂も屋根が二重になっています。しかしながら、五重塔では、初層のみ室内をつくります。第二層以上には床が張られていません。組物から引き込まれた部材が組み合わさっていて、まったくの屋根裏です。法隆寺金堂の上層の内部も同様です。

このような重層の形につくる寺院建築は、中国から日本に入りました。中国では重層の楼閣をつくり、上層に上がって眺望を楽しむ伝統が古くからあったのですが、仏教が中国に入った時、重層の楼閣の形

を仏教の塔に援用したのです。ですから中国の仏塔も上に上がることができました。しかし、この仏塔の形が日本に入った時、上層に上られるようにはつきりませんでした。この理由は不明です。

では、上に上られるような建築は皆無だったかという、そうでもなくて、現在復元建築が建設中の平城宮跡、大極殿院の東西楼は上層に床が張ってあります。鎌倉時代になると、鎌倉と京都に禅宗寺院がつぎつぎと創立されたのですが、正面の大きな門(三門という)は、重層建築でして、上層には床が張ってあって、内部に羅漢などの仏像が安置されました。また、全国的に展開した天台宗・真言宗の寺院では楼門という形式の門が使われることが多かったのですが、上層に床が張ってあって、上がることができました。ただし、双方の門ともに盛大な儀式が開かれる場所ではありませんでした。

室町時代に入ると、将軍の邸宅の奥側につくられた庭園には、上層内部が仏堂や居室になっている建物がおかれるようになりました。

禅宗の僧侶が中国の禅文化の1つである作庭を国内に導入したのです。そのなかでも、夢窓疎石(1275~1351年)による西芳寺の庭園は名園であるとみなされていました。庭園には二階建ての舍利殿以下、多彩な施設がおかれて、それぞれ禅の境致を示すものとされました。将軍邸の庭園は西芳寺のそれを手本にしてつくられたのです。

洛中に設けられた将軍邸は、のちにすべてが破却されてしまったのですが、洛外に設けられた足利義満の北山殿、義政の東山殿が、それぞれ鹿苑寺、慈照寺としてのこされたので、金閣と銀閣がかりうじて重層建築の姿を伝えることになったのです。

つぎに、第二点について説明します。

まず全体の構成と外観について(図1)。庭園の重層建築で三層のものは他にはないので、大変に破格なものといえます。屋根は最上層の上と、第二層の上にあるので、二重の構成です。第二層は最下層の上の腰組みの上に乗ります。これは先述した楼門と同様で、門では普及していた方法です。また柱は各層ともに角柱です。これは住宅建築の技法です。

上の二層は外側に金箔を貼ります。これも異常といえるでしょう。建物の外側に金を

使うのは、中尊寺金色堂(平安時代末)、金閣、織田信長による安土城の最上層部分(1576年頃)、豊臣秀吉による黄金の茶室(1586年頃)など、わずかな例に限られます(川上貢先生は、成り上がりの人物の成金趣味と解釈しています)。

最上層は、扉に両開きの^{さんからど}棧唐戸、窓は^{かとうまど}花頭窓とします。柱上には^{とひじき}斗と肘木からなる組物もおいてあります。この3つの要素は仏堂に用いる方法です。第二層は、扉に^{まいらど}舞良戸(横棧の引違戸)を多く用います。同時代の住宅に多用された技法です。初層は、南側に^{しとみ はじとみ}広縁をつくり、^{しとみ はじとみ}蔀(半蔀)を釣ります。蔀は平安時代の貴族邸宅(寝殿造)を特徴づける建具ですが、のちのちまで高級邸宅をつくるときの道具立てとして、使い続けられました。江戸時代末に再建された現在の京都御所にも多用されていますし、中世の仏堂の正面の建具にも多く使われました。

それゆえ、外観は、下二層が高級住宅風であり、最上層は仏堂風、ということになります。

つぎに室内について説明しましょう。最上層(扁額に「究境頂」)は、床は黒漆塗り、天井は鏡天井、天井と四周の壁は金箔を押してあります。第二層(「潮音洞」)は、内部に観音菩薩像を安置しています。床は黒漆塗り、天井は白、周りの壁は金箔押しです。初層は、床は板をよく磨いた拭板敷です。^{しゆみだん}須弥壇があります。天井は鏡天井です。

内部の仕上がりからみると、すべて鏡天井なので仏

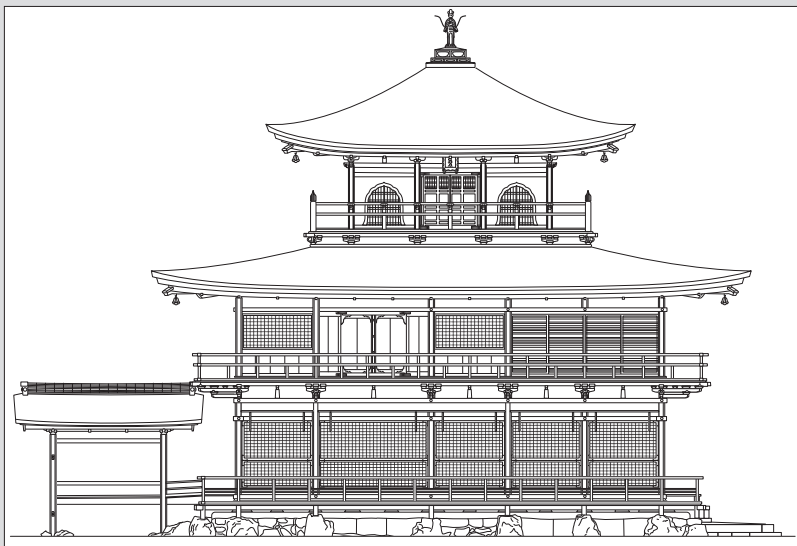


図1 正面図(『日本建築史基礎資料集成16 書院1』(中央公論美術出版、1971年)より作成)

堂風といってもよいでしょう。とくに第二層・最上層は、床が黒漆塗り、四周の内壁が金箔押し、という尋常でない仕上げとなっています。

金閣は、前述したように、もともと仏舍利を安置した「舍利殿」であったというから、仏殿の要素を色濃くもちながら、しかし、庭園にそびえる高層建築でもあって、上階から眺望も楽しむことができる建築であったということになります。

黒漆を全面的に使い、その上に金箔を押すという技法は、約170年後に、狩野永徳の描く禅宗寺院図(上杉本洛中洛外図屏風、洛外図屏風の相国寺や臨川寺)、さらに織田信長による安土城天守の上層部に引き継がれます。また、建物を縦方向に重ねる、という手法は、安土城の頃から発達し、全国の城郭でいろいろな方法が試されることになります。

※なお、現在の金閣は、1950(昭和25)年に放火で焼失後、1955(昭和30)年に復元再建したものです。

参考文献

- 太田博太郎「楼閣建築に関する一考察」(『日本建築史論集Ⅲ 社寺建築の研究』岩波書店、1986年、初出1941年)
- 鹿苑寺編『鹿苑』(鹿苑寺、1955年)
- 玉村竹二「禅院の境致」(『日本禅宗史論集』上、思文閣、1976年、初出1955年)
- 赤松俊秀・川上貢『金閣と銀閣』(淡交新社、1964年)
- 宮上茂隆ほか『金閣寺・銀閣寺』(新潮社、1992年)
- (ふじい・けいすけ/東京大学名誉教授)